

右御無沙汰の御詫旁々要々まで申上げます。
(十一月二十三日夜)

(木蔭第二巻七号・昭和五年三月十五日)

来る八月廿五日御嚴修の良寛百年忌

並に木蔭會總會には是非列席致したきつもりにて楽しみにしてゐたのですが、折あしく先般來家内歸省中にて目下留守居の身、それに一兩日中に越後より友人來訪の筈にて旁々遺憾ながら參會致しかねますから何卒不惡御諒察願ひ上げます。

(木蔭第二巻第十一号・昭和五年十月十五日)

後便の「良寛百年忌」には、手紙にあるように出席していないが、「良寛和尚百回忌並に詩碑建立寄付金」として金十円を寄付している。詩碑はいうまでもなく市内本町直指院境内に建立されている「良寛詩碑」のことである。

四

次は、『木蔭』などに載っている小和田毅夫の歌。

神通川

・神通の川の川洲に鴉群れ
水上遠く晴れにけるかも

(木蔭第一号・昭和三年四月)

小和田はこの歌を詠んだ翌年四月、糸魚川中学校から石川県立七尾中学校に転勤しているので、この歌はそれに

関係しているのかも知れない。

春深し

・ふみ見てゐし心はいつかうつゝな
くかはづの聲にとられけるかも

(木蔭第二号・昭和三年五月)

いとし子

・畑ぬちに入らむとすれど針金を
越えむすべ知らにまはり居る吾
子よ

・いつのまに習ひたりけむ草ちぎり
なげつゝ子等といさかふわざを

・わがあしき性受けたらむ子のわざを
驚き見つゝもだしたりけり

(木蔭第三号・昭和三年六月)

子どもを詠んだ歌。「草ちぎりなげつゝ」は、男の子であろうか。

三首目の「わがあしき性」の「わが」は自分のこと。いかにも教師の目で詠んだ教師の歌。

梅雨晴

・うたゝ寝の母が枕邊に幼児は
積木の家をつくりあかずも

(木蔭第四号・昭和三年七月)

兒を悲しむ

・大帝の生れましゝ日生れあへる
なれのさきはひ壽ぎてしものを

・吐息するたび小さき頭は波うちぬ
あはれ救はむすべもあらず

・玉の緒の命かなしも醫師よぶ
暇をもまたでいきたえにけり

・丹のほゝのやゝあせにたれ安らけ
き 面わはつねの寝がほのまゝ
なる

・いくたびか蔽ひの布をとりて見つ
る あきらめがてのそのかの母よ
・めぐし子の柩送りて吹雪する
野邊の細路妻とわが行く

(木蔭第十号・昭和四年二月)

夭折した娘を詠んだ連作。子を持つ親の胸を打つ。

合歡の花

・唯一人土いぢりしてあらむ父

われの戻りをひそに待ちわびにつゝ

(木蔭第二巻第七号・昭和五年三月)

転勤した七尾での歌。息子の帰宅を待ちわびる父は、年をとっていたのだろうか、病弱だったのだろうか。

小和田毅夫書簡

昭和七年七月十三日

封書・本文巻紙

